



TITLE:

<大會抄録>後期オスマン朝における
イエニチェリ軍團上層部の昇進
過程について

AUTHOR(S):

鈴木, 董

CITATION:

鈴木, 董. <大會抄録>後期オスマン朝におけるイエニチェリ軍團上層部の昇進過程について. 東洋史研究 1988, 47(3): 590-590

ISSUE DATE:

1988-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154247>

RIGHT:

四一／一四二二—三八）と並んでこの王朝の第一世代を代表するスルターンであった。シリアにおける反亂の中から勢力を伸ばしスルターン在位中には、毎年のようにシリア方面への遠征を行うとともに様々な内政改革を行った。また、ペストが蔓延して社會不安が増大した時代でもあった。

これまでの諸研究に於ても、この時代のいくつかの特徴に就いては言及されてきたが、全體としての考察は、爲されていないようである。

本報告では、カイロにおいてムフタスィブ（市場監督官）の職務を自ら行なうとともに、また、この行政職にマムルークを任命したこと、またハナフィー派やスーフィーに對する優遇など後の時代に影響を与えた施策の時代背景について考察する。また、イブン・タグリービルディーを始めとする年代記の當該時代の敘述内容を比較してその特色を述べたい。

後期オスマン朝における

イエニチェリ軍團上層部の昇進過程について

鈴木 董

中東のイスラム諸國家においては、軍隊の二元的構成が、特徴的に見い出される。すなわち、その軍隊は、君主と同民族出身の自由民からなる軍隊と、異民族出身の奴隸軍人からなる軍隊とから構成せられている場合が多い。オスマン朝においても、この二元的性は、

ムスリム・トルコ系の戰士達に淵源を有するティマル制軍隊と、キリスト教徒出身の改宗奴隸からなるカプクル軍團として見い出される。

カプクル軍團の中核をなすのは、歩兵軍團たるイエニチェリ軍團であった。イエニチェリ軍團は、オスマン史上、軍事的のみならず政治的にも極めて重要な要素であった。とりわけ、一六世紀後半以降の後期オスマン朝の政治過程においては、しばしば政治的に決定的な役割を果たした。

ここでは、この軍團の長官たるイエニチェリ・アースィを頂點とする軍團上層部の構成と昇進について、法令集成・政論書・年代記を主たる材料としつつ、検討を加え、イエニチェリ軍團上層部の性格と、イエニチェリ軍團がオスマン朝の支配組織内の昇進過程全體の中に占めた位置を明らかにするとともに、イエニチェリ軍團の政治的意義の變遷の一端にも言及することとしたい。

清初における舊明朝の王府莊田

佐藤 文俊

各地に分封され厖大な數値となった明の諸王の存立基盤は、明末農民反亂により一掃された。清朝は反清行動をとる朱氏を討滅し、「投誠」者は生存を保証すると共に、軍餉捻出の急務から明中期以降、王府・勳戚が集積した莫大な財産に注目した。王府莊田は「變價」「租田」の二方法で處理されたが、特に前者に力點をおき民田